

古代エジプト人の祈りを、神像の科学的調査から読み解く！

クラウドファンディング型社会発信研究補助計画を活用した外部資金の獲得
の事例報告

山花京子

Revealing the Ancient Egyptian's Piety through Scientific Investigation of a Baboon God Figure

Progress Report of the Crowd Funding Project of Tokai University

YAMAHANA Kyoko

1. クラウドファンディング応募の経緯

東海大学には古代エジプトに関連する約6000点の遺物と約15000枚の写真資料があります。これらは故鈴木八司名誉教授のご遺族より2011年に寄贈を受けたもので、現在は古代エジプト及び中近東コレクション（略称AENET）として文明研究所が管理運営を行っています。発表者は文明研究所の所員として「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤構築II」のプロジェクトリーダーを務めており、コレクション遺物を全国の博物館・美術館に出陳するための維持管理と学芸業務を担っています。

AENETコレクションの大部分は古代エジプトの先史時代から王朝時代の遺物で、日本において約6000点も収蔵しているのは東海大学のみです。したがって、本学では我々人類の貴重な文化遺産を後世に伝えるという使命も担っています。

しかし、AENETコレクションの遺物にはそれらが作られてから2千年以上経過しているものも珍しくなく、そのために経年劣化が深刻な問題となっています。今回クラウドファンディングの対象となったヒヒ神像（SK219）も大きなヒビや亀裂が見られます。ただ残念なことに私立大学が所有するコレクションの修復保存は公的な資金援助を得ることが難しいのが現状です。そこで、2021年度より開始された総合研究機構のクラウドファンディング型社会発信研究補助計画の新施策に応募しました。

東海大学と（株）academistのコラボレーション

東海大学総合研究機構が2021年度より開始しているクラウドファンディングのチャレンジャーとして「古代エジプト人の祈りを、神像の科学的調査から読み解く！」というテーマを掲

げて本学 AENET コレクションが収蔵する世界的にも珍しい複合神像（様々な素材を集めて作った神像）の保存修復に先立つ科学的調査のプロジェクトを企画しました。本稿ではこの研究テーマをクラウドファンディングという形で一般に向けてアピールし、支援者を募り、研究につなげる方法を体験をもとに報告し、後続の研究者への一助としたいと考えています。

東海大学総合研究機構による本施策は 2021 年度が初年度でした。6 月 10 日の記者会見までにクラウドファンディングのサイト作りと支援金額や返礼の取り決めを大学及び（株）academist と相談し、記者会見当日にはオンラインプレゼンテーションを行いました。東海大学は大学公式ツイッターに情報を流すとともに、大学 HP と東海大学新聞に「総合研究機構が「クラウドファンディング型社会発信研究補助計画」を開始しました」を掲載しました。

東海大学総合研究機構ではこのほど、学術系クラウドファンディングサイト「academist（アカデミスト）」を運営する academist 株式会社とパートナーシップ契約を締結し、「クラウドファンディング型社会発信研究補助計画」を開始しました。本施策は、研究費獲得を目指す研究テーマを学内公募し、寄付金額が目標に達した場合のみ成立する「All or Nothing 型」で支援を募り、研究遂行に必要な経費の半分を獲得した際に、残りの研究費を本機構が補助するもので、国内の大学では初めての取り組みとなります（本学調べ）。「academist」をプラットフォームとし、クラウドファンディングを通じて大学の研究を広く社会へ周知するとともに、大学としての支援も強化します。

（大学 HP 2021.06. 11 総合研究機構が「クラウドファンディング型社会発信研究補助計画」を開始しました <https://www.u-tokai.ac.jp/news-section/43961/> 20210728 閲覧）

2. 東海大学所蔵古代エジプトのヒヒ神像

古代エジプトコレクション（AENET）のヒヒ神像（SK219）

AENET コレクション内のヒヒ神像は古代エジプトの文字（知恵）を司る神であり月の神でもあるトト（古代エジプト語ではジェフウティ）を表現しています。古代エジプトの王朝時代の識字率は 3%にも満たなかったといわれているため、トト神はエリート階級の官僚たちの守り神でもありました。トト神は本来はトキの姿をしており、長くちばしを使って泥水の中から餌を探す様子が文字を描いているように見えたため、文字や知恵を司る神と見なされるようになったといわれています。一方、マントヒヒは朝活動を始める時に手を太陽にかざすような仕草をし、集団で声を発生することから、言葉を司る神と見なされたようです。両者ともに文字や言葉と関連していたため、長いエジプトの歴史の中で神々の習合が起こり、トト神とヒヒ神が同一視されるようになりました。

トト神がマントヒヒとして表現されるのは新王国時代（紀元前 1550–1070 年頃）からです。マントヒヒ（*papio hamadryas*）は古代エジプト語でバビと呼ばれ、ヒヒの中で最も力強いも

のという意味があります。新王国時代には頭に日輪と三日月を組み合わせた冠を戴き、豊かな被毛を上半身に纏い、両手を両膝頭にあてて座るヒヒ神の彫像が作られるようになりました。この頃の石製彫像の中には、ヒヒ神が人間よりも上段に座し書記（官僚）の姿をした奉獻者が知恵の言葉を授けている場面を表現したもの（ルーヴル美術館 E11154）や、高級官僚の服装を身に着けた奉獻者がヒヒ神の祠を奉持している例（ルーヴル美術館 A110 及び A65）があります。

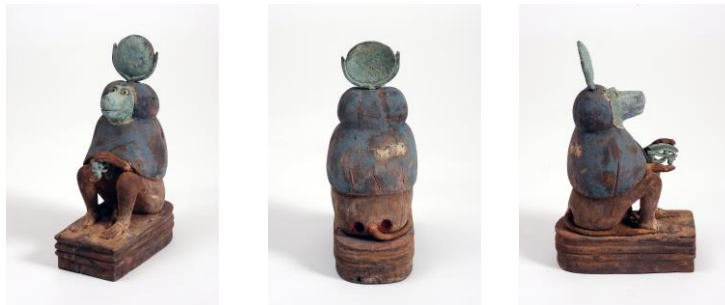


図1 東海大学所蔵（AENET コレクション）SK219 ヒヒ神像3方向からの写真

今回のクラウドファンディングの対象となったヒヒ神像（AENET SK219）も古代エジプトのヒヒ神像の典型的な表現に倣い、円盤状の冠を戴き、上半身を覆うマント下から両手が出ており、「ウジャト眼」と呼ばれるホルス神の眼の形の護符（王権を司る神の眼で「完全」や「治癒」を意味する）を奉持しています。ヒヒ神像は前方が丸い台座の上に座していますが、ヒヒ神像の護符を奉じる手の位置や護符の形状、そして台座の形はこの神像が古代エジプトの歴史の比較的後の時代に作られたことを示唆しています。ヒヒ神像の類例は世界の博物館・美術館等に約 30 件あり、中には出土地や年代が明らかなものもあります。そのような類例と照らし合わせると、SK219 のヒヒ神像は末期王朝時代からプトレマイオス朝時代（紀元前 664—紀元前 32 年）に属すると推定することができます。

世界の博物館・美術館に収蔵されているヒヒ神像は石製のものが最も多く、中にはトルコ石やラピスラズリに似せたファイアンスと呼ばれる人工物質と金銀を組み合わせた像などもあり、概して高価な材料で作られています。それは永遠に存在する神々は耐久性の高い材料で制作すべき、という当時の神像制作の暗黙のルールが反映しているからです。そのため、朽ちやすい木製の像は本学所蔵のヒヒ神像のほかには 1 点しか発見されていません（ルーヴル美術館 E130）。SK219 のヒヒ神像は大部分が木製のため、比較的安価で入手しやすい材料で作られていると言ってよいでしょう。しかし、本学所蔵のヒヒ神像の特筆すべきところは木材だけではなく、金属や布などの複数の素材を合わせた複合神像である、ということです。本体は木材、冠と顔、手に持つウジャト眼護符は金属製、目にはおそらく石材で象嵌が施され、尻尾と生殖器は布に樹脂のようなものを浸み込ませ固めて作っています。つまり、この神像は大きな神殿の祠に祀られていたというよりは民間信仰の対象あるいは信心深い個人の奉納者によって祠に安置されていた神像ではなかったのだろうかと推測しました。

SK219 のヒヒ神像を仮に末期王朝時代からプトレマイオス朝時代のものだとすると、今から約 2700 年～2400 年前に制作されたものである、ということになります。したがって、当時は鮮やかだった色彩も退色していますが、上半身のマント部分には青で彩色された痕跡が残り、下半身は黄褐色、台座は赤褐色、そして両手両足の指の爪と臀部は赤褐色で彩色されています。

クラウドファンディングによる科学的調査では、ヒヒ神像の内部構造をはじめとして、表面の顔料や金属部分についても科学的分析を行い、文字通りヒヒ神像を丸裸にすることを目的としました。今後ヒヒ神像を修復するためには、今回の調査結果が不可欠であるからです。

以下ではクラウドファンディングを達成するまでの経緯を述べた上で、達成後に着手している研究とその結果報告を行います。

2. クラウドファンディング達成までの道のり

クラウドファンディングのための目標設定

まず、クラウドファンディングに応募する前に学内での選考がありますが、達成したい目標を設定しておく必要がありました。今回のヒヒ神像のプロジェクトの場合は、近い将来に修復保存措置をとることを前提に、その前段階に行われるべき徹底した科学的調査を目標としました。具体的には 1) ヒヒ神像の X 線 CT スキャン画像解析で内部構造を観察した後、2) 蛍光 X 線分析、ラマン分光分析、マルチスペクトル分析、走査型電子顕微鏡 (SEM) で神像の表面の顔料や金属などの組成と結晶構造の情報を取得、そして 3) 樹種同定と C14 放射性炭素年代測定を行います。加えて、神像が欠損してしまう前に 3D プリントによる神像の実寸大模型を制作することにしました。さらに、上記の調査で顔料、金属、年代、樹種などが判明した後は制作年当時の社会の様子と神像の役割を歴史的に考察し、報告書に掲載することも考えています。

また、クラウドファンディングを始める前に支援金額とサポーターへのリターンを考えておく必要もありました (図 2)。支援金額は大学と (株) academist と相談して 1,000 円～150,000 円に決定、支援金額 1,000 円のリターンを活動報告レポートと寄附金受領書 (大学が発行) を基本リターンとし、5,000 円の場合は基本リターン+謝辞に支援者の名前を記載 (希望者のみ)、10,000 円の場合は 5,000 円のリターン+ヒヒ神像を自在に動かすことができる 360° 画像データ提供、30,000 円はその上にヒヒ神像 X 線 CT スキャンのドキュメンタリー動画を追加、50,000 円はその上にオンラインアカデミックカフェ開催を追加、100,000 円はその上に AENET コレクションの個別オンライン見学会、そして最高額の 150,000 円は大学 HP にお名前を掲載という特典を付けました。そしてクラウドファンディングへのチャレンジが 2021 年 6 月 10 日に始まりました。応募内容の詳細は (株) academist の HP <https://academist-cf.com/projects/221?lang=ja> に記載されています。

クラウドファンディングの進捗報告

6 月 10 日に大学の記者会見終了とともにクラウドファンディングを募る日々が始まりまし

古代エジプト人の祈りを、神像の科学的調査から読み解く！

た。大学や(株) academist の広報に関する支援もありましたが、効果は一時的かつ限定的なため、SNS を主たる告知手段として使用するようアドバイスを受け、Twitter、Instagram、Facebook にアカウントを開設しました。しかし、これらの SNS は時間の経過とともに利用者に忘れられてしまうため、特に Twitter には毎日 2 度の投稿を行うようアドバイスを受けました。SNS への常時発信は学期中で授業や指導を抱えている教員には大きな負担でした。しかし、SNS で投稿すればするほどアウトリーチが広がったことは事実です。

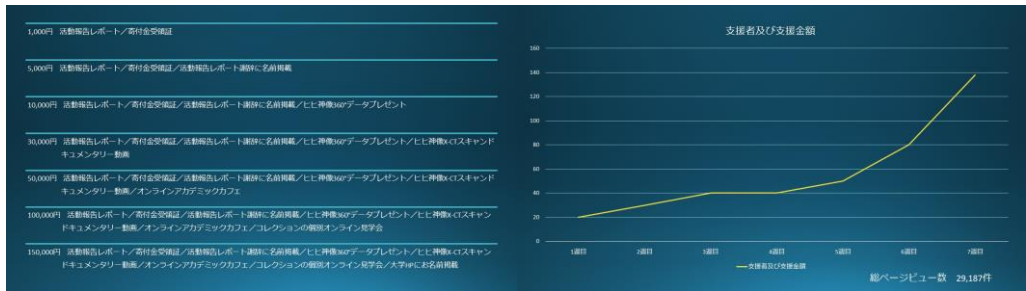


図2 支援者に対するリターンの設定

図3 チャレンジ期間7週間の支援者数推移

図3で示したように、最初の1週間で20名の支援があり、3週目までは支援者の輪がじわじわと増えていき40名となりました。ところが、それ以降の3週目から5週目にかけて支援者数が伸び悩みました。精いっぱい告知をしていたつもりでしたが、やはり限界があると半ば諦めていたところ、(株) academist の担当者から「一般の方々に影響力のあるインフルエンサーに個別に手紙を書いて協力呼びかける」というアドバイスを受けました。今回のプロジェクトならば、古代エジプトの研究者としてメディアに露出度が高く、発言に影響力を持つ人にこちらから声をかけ、告知を行ってもらおう、ということです。この呼びかけについては、かなり悩みました。個別に手紙を書いて送ると、送られた人も支援せざるを得ない立場に陥ってしまうことを危惧したからです。ただ、「ここでやめてしまったらば今まで支援してくださった方々の気持ちを裏切ることになる」との助言を受け、ししぶしながらも手紙(電子メール)を書いて約30名の方々や団体に送ったところ、多くの方々は好意的に受け止めてくださり、ご自身のツイッターやHPで「古代エジプト人の祈りを、神像の科学的調査から読み解く！」を宣伝してくださいました。そのおかげで第5週目から支援者数が急激に伸び、第6週目を過ぎるとそれまで様子見をしていた人たちの支援が始まり、幸いなことに第6週目の中ごろには目標金額の100万円を達成することができました。達成時の総ページレビューは29,187件、支援者の情報源は殆どがTwitterでした。

最終的な支援者の数は150名、支援金額は138万円に達し、クラウドファンディングへのチャレンジは成功しました。支援者の情報はクラウドファンディング終了の数か月後に通知を受けましたが、支援してくださった方々の中には学内関係者や教え子たち、そして研究者仲間が非常に多く、多くの人々に支えられてこのプロジェクトが始まることを肌身で実感しました。

クラウドファンディングのメリットとデメリット

クラウドファンディングにより、広いオーディエンスにアウトリーチができ、自らの研究や目的を周知することができたおかげで、今までは接点のなかった研究者との間で共同研究の話が持ち上がり、今回の研究が将来の関連研究に繋がる事例を体験しました。これはクラウドファンディングで最も大きなメリットであったと考えます。さらに、支援者層はファン層にもつながるため、今後の研究活動を支援者との協同作業とすることで一個人の研究者ではできないことも実現できる可能性が高いことを実感しました。

一方、デメリットもあります。それは、チャレンジ期間中の広報活動や支援者に向けての進捗報告、メッセージへの対応、リターン準備といった多くのことを時間的制約の中で行わなければならない、ということです。学期中でのチャレンジは普段でも学務や教務に多忙な教員にとってはさらなる負担となります。今後クラウドファンディングにチャレンジを考えている方はコミットできる時間をあらかじめ計算しておくことを勧めます。さらに、本学の現行のシステムでは、クラウドファンディングで得た外部資金は大学の研究資金が上乗せされるため、内部資金扱いとなり、その経費管理は大学の規定に則します。つまり、用途を計上したうえで年度内には使い切ってしまうなければならないのです。達成金額以上の資金を得た場合は、余剰分のみが次年度の研究費として繰り越すことができます。したがって、予算を効率よく運用するためにはクラウドファンディングの達成額はなるべく低く抑えておくことをお勧めします。

3. 達成後の進捗報告

「古代エジプト人の祈りを、神像の科学的調査から読み解く！」プロジェクトが成立したのは2021年7月中旬でした。プロジェクト成立とともに東京芸術大学と東海大学の研究者によりヒヒ神像の修復について意見交換を行い、次に上述の1) ヒヒ神像のX線CTスキャン画像解析で内部構造を観察を行い、同時並行で研究協力を申し出てくれた東京電機大学、筑波大学、東京芸術大学の研究者と2) 蛍光X線分析、ラマン分光分析、マルチスペクトルカメラによる分析を行いました。本稿では夏から現在までの研究調査により判明したことを紹介します。

まず、科学的調査に先立ち、東京芸術大学 大学院美術研究科 博士後期課程 文化財保存学 保存修復彫刻が専門の岡田靖准教授と、本学教養学部芸術学科の田口かおり講師にヒヒ神像の現状を調査してもらいました(図4)。その結果、ヒヒ神像の手部分を除いては比較的良好な状態にあることがわかりました。そして、この像は木材を丸彫りにした本体と台座の2本の木材を合わせて作られており、いずれも木芯部分が露出し、節痕も多いことから、広葉樹の比較的細い材木を使ったことが指摘されました。

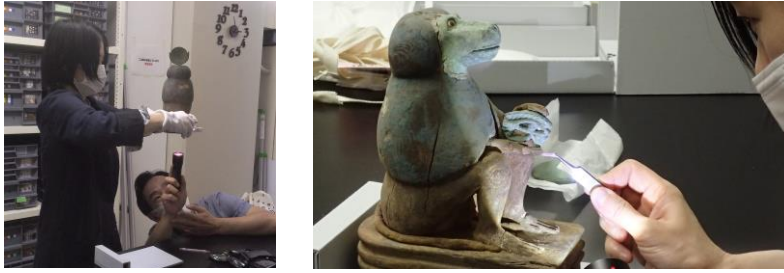


図 4 ヒヒ神像を観察する岡田准教授と田口講師（左）と手の欠損部分を調査する田口講師（右）

調査 1 X線 CT スキャンによる画像解析

次に、本学と（株）ニコンインステックの産学連携包括協定後に設立されたイメージング研究センター（Tokai University Imaging Center for Advanced Research, 略称 TICAR）を利用して X 線 CT スキャンによる画像解析を行いました。今回の研究のために利用した X 線 CT 装置は（株）ニコンソリューションズの産業用 CT 装置 XT H22ST で、この調査には同センターの栗野若江技術員が装置のオペレーションから画像解析までを全面的にサポートしてくれました。

X 線 CT(Computed Tomography)は X 線を対象物に入射した際に X 線が対象物を透過する量を計測し画像化する装置のことです（図 5）。入射する X 線は対象物を様々な角度から走査（スキャン）して撮影するため、X 線 CT スキャンと呼ばれています。X 線 CT スキャンによって画像化されたデータはレントゲン（X 線撮影）で得られる奥行のない 2 次元情報とは異なり、360° の X 線透過像から得られたデジタルデータを専用のソフトウェアで処理することで 3 次元情報（立体情報）が入手できます。つまり、対象物を一度測定するだけで非破壊で対象物の内部情報を得ることができ、必要な角度でスライス画像を入手することもできます。考古学調査には非常に有用なツールとして近年活用が進んでいますが、利用料が比較的高額であることからすべての考古学調査に適用できるわけではありません。しかし、本学では TICAR が学内の共同利用施設として研究者を広く受け入れていることもあり、ヒヒ神像の X 線 CT スキャン画像を取得することができました。

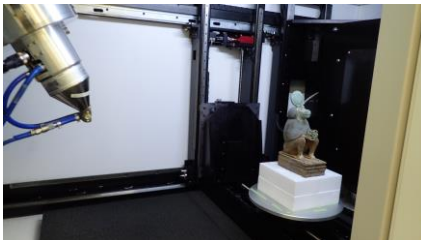


図 5 X 線 CT スキャン装置のチャンパー内のセッティング 左側は X 線発生装置 右側の黒い板状のものが検出器



図 6 ヒヒ神像の 2 次元画像（レントゲン）

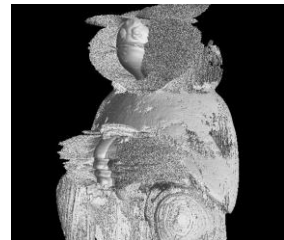


図 7 ヒヒ神像の 3 次元画像

図 6 は X 線 CT スキャンで得られた初期画像（2 次元画像）です。取り外しができるヒヒ神

像の冠を取った状態で撮影しました。この画像だけでも表面からは知ることのできない様々な情報が得られました。まずは本体と台座は密度の異なる木材で作られていることです。本体は空気を多く含む多孔質な木材であるのに対し、台座の木材は緻密であることがわかります。そして、台座の下から2本の木釘が本体に向かって伸びており、本体を固定しています。尻尾も木製の小さな釘で台座に固定されており、木の洞はプラスターで埋められた上に彩色が施されています。全体的に丁寧な作りをしているといえます。顔と護符部分は金属で密度が高いため、黒く映っていますが、ヒヒ神像が手に持つ「ウジャト眼」護符は末端部分が釘のように作られており、像の腹に差し込まれています。金属製の護符の重みが像の手に全面的には押し掛からない構造をしていることがわかりました。そして、金属製の顔部分は本体に空けられた臍に木製のダボが差し込まれていることも明らかになりました。図6より、台座を削り貫くように本体の木部が差し込まれていることから、本体が古く、台座は後補かと思いましたが、本体と台座の間の充てん剤（プラスターと思われる）が顔部分および冠部分の充てん剤と同質であることと、台座と本体をつなぐ木釘が本体の木材と同じ材質であることから、台座は後補ではないように思われます。さらに、台座の上にあるヒヒ神像のつま先部分は台座から彫り出されています。つまり、本体のヒヒ像は足の甲の付け根の部分までを彫り出し、残りの足の甲と指部分は台座から彫り出して接合してあるのです。図6では足のつま先部分と足首部分とでは木材の透過度が違っていることがわかります。このように、つま先部分だけを台座から彫り出して本体と合わせている像は古代エジプトではあまり類例がありません。しかし、前述の仏像修復の専門家である岡田靖准教授は、日本の仏像にはこのような例は多く、木目に逆らわないように足の部分を造形するためには足首もしくは足の甲の部分で木材を接ぐ方法が一般的だとコメントを寄せてくださいました。

図7は図6の2次元画像を3次元に変換処理した立体画像です。この画像では顔や手の周辺に大きなハレーションが出ていることがわかります。X線CTスキャンでは、木材などの柔らかくX線の透過度の高い対象物に対しては低いエネルギーのX線を照射し、金属などの硬くて密度の高い対象物に対しては高いエネルギーのX線を照射する必要があります。図7は木部に照射エネルギーを合わせたために、金属部分がハレーションを起こしてしまい、正確なデータを得ることができませんでした。この後、木部と金属にターゲットを合わせたスキャンを幾度か行いエネルギーの異なるX線を照射しましたが、金属部分には重い金属元素が含まれていてハレーションを取り去ることが難しいという問題に直面しました。この問題は現在も解決に向けて試行錯誤を続けています。

調査2 蛍光X線分析、ラマン分光分析、マルチスペクトル分析による表面情報の調査

次に東京電機大学の阿部善也博士¹、筑波大学の村串まどか博士²、東京藝術大学の高橋香里博士³との共同研究としてヒヒ神像の表面情報の調査を行いました。阿部氏と村串氏はポータブル蛍光X線とラマン分光分析装置を本学の収蔵庫へ運び込み、ヒヒ神像の表面に塗布されている顔料の元素組成と結晶構造を解明し（図8、9）、高橋氏は光の5つの波長を用いたマルチスペクトルカメラによる分析によって人間の眼では識別できない色情報を可視化する調査をおこ

ないました（図 10）。これらの分析はいずれも貴重な文化財を破壊することなく調査できる方法で、発掘現場などでの現地調査に役立っています。前述のように、ヒヒ神像は金属の冠、顔、ウジャト眼護符を除いては木製で上半身のマント部分は青色、下肢は黄褐色、臀部と手足の爪は赤褐色、台座側面も赤褐色で彩色されています。経年変化により退色が激しいため、制作当時の色は現在の色とは違う可能性があるため、元素分析や結晶構造を見極める必要があるのです。



図 8 ヒヒ神像の目の蛍光 X 線分析

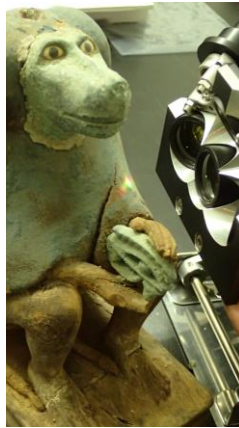


図 9 ヒヒ神像のマント部分のラマン分光分析



図 10 マルチスペクトルカメラで撮影したヒヒ神像の VII 補正結果 白く光る部分はエジプシャン・ブルー

こちらの結果はまだ全て明らかになっているわけではありませんが、ヒヒ神像のマント部分の蛍光 X 線分析からは銅とカルシウム、石英が検出され、さらにマルチスペクトルカメラによる撮影で蛍光を発することが確認された（図 10）ため、この青色顔料はエジプシャン・ブルーであると断定されました。エジプシャン・ブルーとは、古代エジプト人が紀元前 3000 年頃に作り出した最初的人工顔料で紀元後 4 世紀には製造されなくなりました。したがって、この像の作られた年代がある程度絞られたこととなります。さらに、臀部や手足の爪、そして台座側面に使われていた赤褐色顔料は蛍光 X 線分析では鉄が検出され、ラマン分光分析ではヘマタイト（赤鉄鉱）と断定されました。下肢の黄褐色は黄土（イエロー・オーカー）、白目部分は方解石（カルサイト）であることがわかりました。これらの顔料は古代エジプトの典型的な顔料として王朝時代を通して使われています。ヒヒ神像に使われている顔料の中で、手足の爪と台座に使われていたヘマタイトはいずれも同質で、修復などで色を補った形跡はありませんでした。金属部分についても冠、顔、そしてウジャト眼護符からは銅と亜鉛、そして錫、鉛が検出されています。銅と亜鉛の合金は真鍮で、真鍮はローマ時代には一般的となりますが、それより以前のプトレマイオス朝だと数例しか類例がありません。さらに、冠の一部からは鉛が多く検出されていることから、真鍮に鉛を被せた可能性も出てきました。ただ、金属部分は腐食が激しく、表面の分析だけでは合金の状態がわからないため、今後は工学部材料科学科の葛巻徹教授との共同研究としてマイクロサンプリング分析⁴を行い、金属部分が作られた時の状態をより

詳細に分析する予定です。

4. ヒヒ神像と当時のエジプト社会

上記が現在までに結果の出ている調査となります。これ以外にも（株）パレオ・ラボに依頼した樹種同定や東京大学総合文化博物館放射性炭素年代測定室に依頼した年代推定がありますが、結果が出次第、報告書としてまとめ、さらに3D プリントアウトしたヒヒ神像に塗装も施して「触る展示」にも活用したいと思います。

未だすべての分析結果が出揃っていない状況ですが、ここで少しヒヒ神像が制作された当時の社会についても考えてみたいと思います。

現在の予測では、このヒヒ神像は紀元前7世紀～紀元前後の間に作られたと推定しています。つまり、時代的には古代エジプトの王朝が衰滅の途をたどる時期と合致しているのです。栄華を誇った古代エジプト王朝の最後の輝きと言える第20王朝のラメセス3世(紀元前1183-1152年頃)の治世から約500年が経過し、古代エジプトはメソポタミア方面からやってきた新アッシリアや続くアケメネス朝ペルシアの支配下にはいります。この像の制作年代上限と考えられる末期王朝時代(紀元前664-335年)は外来王朝による統治と土着勢力による抵抗が繰り返された混乱の時代でした。この間に王位についた第26王朝の王たちはギリシア人の植民を奨励し、この時代以降、エジプトは次第にギリシアを中心とした東地中海文化に取り込まれていくのです。その後、マケドニアのアレクサンドロスによりエジプトは征服され(紀元前332年)、アレクサンドロス亡き後はダイアドキであったプトレマイオスによってエジプト最期の王朝が打ち立てられました(紀元前304-30年)。プトレマイオス朝になると、エジプトの首都は地中海沿岸のアレクサンドリアになり、マケドニア(広義のギリシア)の血を引くプトレマイオス王家とそこに居住するギリシア人たちが政治や文化を担うようになります。王朝の始祖プトレマイオス1世(紀元前304-285年)から3世(紀元前246-222年)までの治世においてはペルシアによって奪われたエジプト人たちの信仰の対象である神像を取り戻して神殿に再安置しています(紀元前243年)。また、エジプト古来の神々の彫像を王像と共に制作し、金銀で装飾された調度品とともに神殿に寄進を行う(紀元前217年)⁵など、土着のエジプト人の心情を和らげるような融和政策をとりました。エジプト各地の神殿にはプトレマイオス王家の王や王妃の神像が神殿の最も目立つ場所に安置されるようになったのです。そして、次第にエジプト古来の神々はギリシアの神々と合祀されるようになります。これは、古代エジプト人が確固たる基盤を築いていた各地の神殿に王家の意向を浸透させようとする巧妙な仕掛けでもありました。筆者が発掘調査に参加していた中エジプトのアコリス(現テヘネ・エル=ジェベル)においても古来のアメン・ソベク神の岩窟祠の裏にディオスクーロイと女神像やアプロディーテー、サラピス神などのヘレニズムの神々が併せて祀られており、さらにローマ属州時代に入るとエジプトの神は外来の様々な神と同一視されるようになります⁶。しかし、紀元後2世紀を過ぎるとエジプトの神殿の経営基盤でもあった国家による庇護が薄れ、神殿での宗教活動についての記録は殆どなくなります。さらにディオクレティアヌス帝(紀元後284-305年)による神殿へ

の弾圧は熾烈を極めたことで神殿の多くは半ば放棄された状態になりました。最後まで残っていたフィラエ島のイシス神殿がビザンツ帝国のユスティニアス 1 世の治世に閉鎖された（紀元後 553 年）ことで古代エジプトの神々への信仰は歴史から消滅してしまったのです。

AENET コレクションのヒヒ神像は古来の宗教や文化が衰退し、次第にギリシア的なものに置き換わっていく過渡期に作られました。為政者がギリシア系だったため、当時の公文書等の様々な記録は彼ら支配者層の社会を復元する手掛かりを与えてくれはするものの、被支配階級の土着のエジプト人たちの暮らしについては限られた情報しかありません。そのような中で、古代エジプトの古来の神々への信仰が潰えることなく続いていたことを示すものがこのヒヒ神像なのです。

前述のように、このヒヒ神像は比較的安価な材料を使って制作した複合神像です。つまり、大きな神殿に祀られるような神像ではありません。ヒヒ神（トト神）の信仰の総本山は中エジプトのヘルモポリス（現エル・アシュムネイン）にあります。信仰の中心となるトト神殿の周囲には数多くの祠や墓が立ち並び、奉献碑や奉献者の彫像、祠に祀られた神像、そして数多くのトキのミイラなどが発見されています。AENET のヒヒ神像もおそらくはこの地に縁があり、小さな祠に奉納者の銘とともに納められたものではないかと推測しています。プトレマイオス朝はアレクサンドリアを首都としていましたが、当時のアレクサンドリアは北は地中海に開けた港である一方、南はマレオティス湖という吃水湖によって土着のエジプト人の住む地と隔てられた場所でした。アレクサンドリアはいわば陸の孤島のような立地にあり、新参者の為政者は土着のエジプト人勢力の脅威を隣り合わせに感じることなく過ごすことができたのです。そのため、プトレマイオス朝の王たちは古代エジプトの神々を迫害するようなことはしませんでした。

ここから先は推測の域を出ませんが、AENET コレクションのヒヒ神像は地中海沿岸地域から多くのギリシア系の人々がエジプトに定住し、プトレマイオス朝そしてローマの支配下にはいってもアレクサンドリアから遠く南に離れた地方の神殿にてヒヒ神像は地方の書記階級の人たちを中心に大切に扱われ、しばらくの間は継続して信仰されたのではないかと思います。SK219 のヒヒ神像はいわば歴史の陰に隠れていた古代エジプト人の信仰を現代の世に伝えてくれる像ではないかと考えるのです。

謝辞

本研究はクラウドファンディングを支援してくださった多くの方々によって支えられています。ここに記して感謝の意を表します。

付記 本稿は文化社会学部 2021 年度 1 回研究交流会（2021 年 11 月 24 日オンライン開催）で発表した報告の記録である。

註

¹ 東京電機大学工学研究科物質工学専攻助教

2 筑波大学人文社会系 特別研究員 (PD)

3 東京藝術大学大学院美術研究家文化財保存学専攻保存修復研究領域

4 金属を表面から 20 μm程度のサンプルを一定の深さまで数段階に分けて採取し分析し、成分や純度を明らかにする手法。東海大学新聞 2017年2月1日号参照

<https://tokainewspress.com/view.php?d=1315>

5 周藤芳幸 『ナイル世界のヘレニズム—エジプトとギリシアの邂逅』, 名古屋大学出版会, pp. 254-282. 紀元前243年にはアレクサンドリア決議、紀元前217年にはラフィア決議が出された。

6 山花京子「古代エジプトにおけるヘレニズムの神々の受容について—中部エジプトのアコリス遺跡を例に一」, 『文明』, 文明研究所, 2003, vol.3, pp. 67-76.